親族里親など
被災地の里親子に関わって

宮城県里親会会長
日本ファミリーホーム協議会会長
卜蔵康行

震災孤児の養育状況（宮城県）

養育者等	未就学	小学生	中学生	高校生以上	合計
祖父母	5名	30名	14名	11名	60名
おじおば	3名	14名	9名	20名	46名
他親族	0名	3名	2名	7名	12名
離婚父母	1名	6名	4名	5名	16名
施設入所	0名	0名	1名	0名	1名
合計	9名	53名	30名	43名	135

宮城県子育て支援課　2013年1月資料

里親制度の利用状況

宮城県子育て支援課2013. 8. 1現在

	親族里親		養育里親		合　計	
	世帯数	児童数	世帯数	児童数	世帯数	児童数
中央児童相談所	4	6	2	4	6	10
東部児童相談所	14	19	10	11	24	30
気仙沼支所	7	7	2	3	9	10
北部児童相談所	1	2			1	2
合　計	26	34	14	18	40	52

親族里親支援事業

安心こども基金を財源

・里親サロンの開催
　主催　宮城県里親会
　共催　東北大学　震災子ども支援室（通称Sチル）
　　東北大学大学院教育学研究科に開設　室長　加藤道代教授
　協力　各児童相談所
　出席　里親会・Sチル（心理士・保健師）
　　児相里親担当
　　旭ヶ丘学園児童家庭支援センター
　　（気仙沼）

里親サロン開催の状況

・石巻市
2012. 2. 28　7名
7. 3　7名
10. 31　4名
2013. 3. 20　4名
7. 3　4名

・気仙沼市
2012. 5. 16　7名
9. 6　6名
2013. 2. 1　6名
6. 5　5名

・東松島市
2012. 8. 28　2名
11. 27　2名
2013. 6. 19　2名

延べ56名の参加

里親サロンから

・養育者自身の心のケアの必要性
　子・兄弟・いとこなど身近な肉親を失う
・祖父母の高齢化、健康問題　養育の継続の問題
・孤児と養育者の震災以前の距離には差が大きい
　子育てに戸惑うケースも
・時間の経過とともに、安定している様子が見られる
　子育ての工夫、丁寧な対応
・里親サロンの有用性→ピアグループ
・続けることの大切さ→“出席したいと思っていた”
・孤立化を防ぐ

里親子支援の課題

・住環境整備の課題　仮設住宅に住む里親
　東部　7世帯　気仙沼　3　中央　1
　養育の負担と2重の負担
・継続的支援が必要　児相は担当者の移動あり
　継続的な支援・相談機関も児相の他に必要
　例えば、児童家庭支援センター、Sチル
・経済的な問題　里親制度を利用しているものの
　子どもとの震災前の関係が遠い里親の場合、
　経済的負担を感じているケースもある

・継続的なサロンの開催が求められている
　“ずっと続けて欲しい”の声
　事業継続のための財政的な支援の必要性
・思春期の問題
　今後、子どもの成長とともに現れる可能性
　子育て・養育支援
・被災地域でのDV、虐待通告の増加に対応
　→社会的養護の予防的支援
　住環境を含めた生活環境の改善
　ひとり親家庭
　被災した母子・父子家庭への支援